京都の庭園 12

名勝仁和寺御所庭園
－遼廓亭周辺の調査－

http://www.kyoto-arc.or.jp
(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　遼廓亭の調査地（写真左：北東から）と検出した土塀１基底部（写真右：北から）

はじめに　仁和寺は、仁和４年(888) に、宇多天皇 (867 ～ 931) によって建立され、明治時代まで皇族が住職(門跡)を務めた真言宗の寺院です。周辺には、平安時代から鎌倉時代に多くの関連寺院が建立され栄えましたが、室町時代に応仁の乱で境内全域が焼失・荒廃しました。現在の仁和寺の景観は、江戸時代前期に行なわれた復興・再建によるものです。

遼廓亭　調査地は、史跡仁和寺御所跡の敷地内、門跡の居住域である御殿・本坊地区北部に所在する遼廓亭 (重要文化財) の北東部にあたります。遼廓亭は、江戸時代の陶工である尾形乾山 (1663 ～ 1743) の住居を移築したといわれている茶室です。遼廓亭北東部には、池と滝組が広がっており、滝組のさらに北東部を調査しました。

調査成果　今回の調査は、排水施設敷設に伴う調査です。調査では、江戸時代後半の土塀を検出し、現存する石組溝も同時代の遺構と判明しました(図２)。

土塀１：２・４～７区で検出した幅 0.75m の土塀跡です。方向は、２・５～７区では南東から北西方向に延びますが、４区で西方向に屈曲して東西方向となります。土塀基底部は、

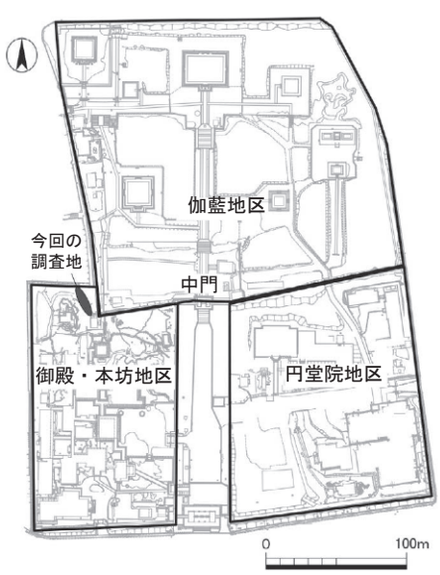

図１　仁和寺境内と調査地点 (S=１：5,000)

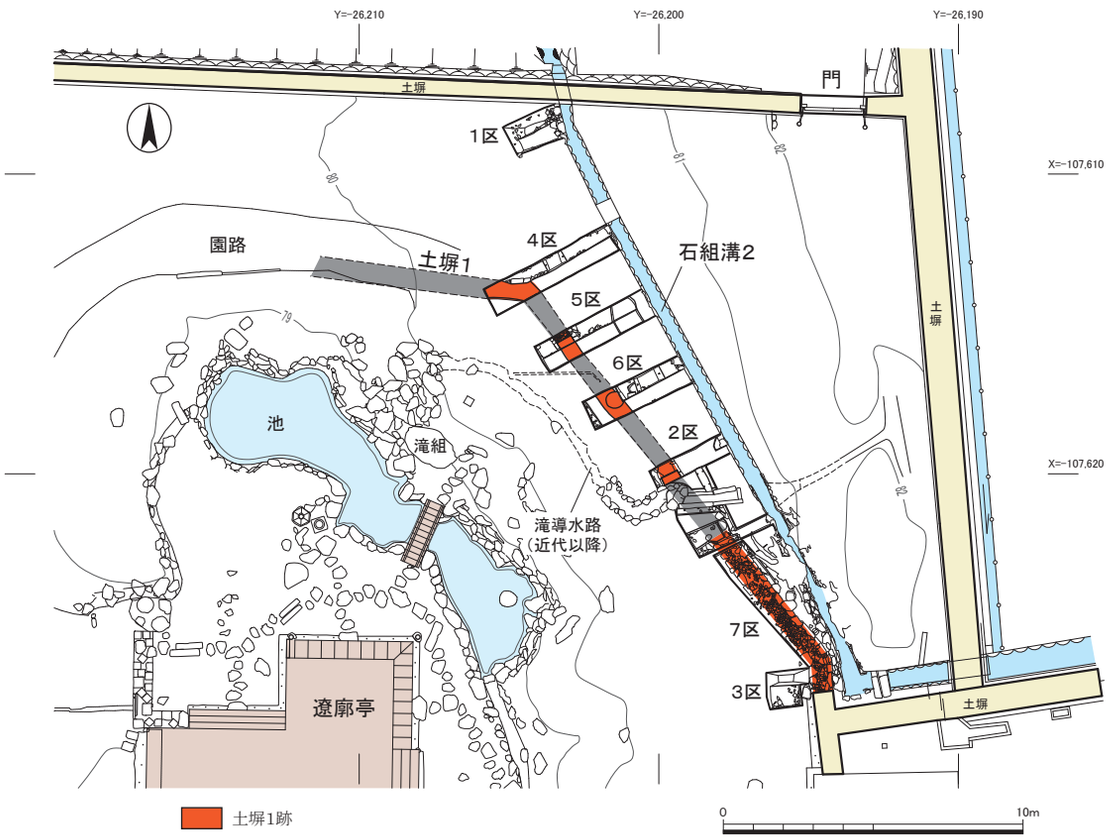

図２　調査位置（S=１：250）

地覆石が２列に並び、その間にはこぶし大の石が敷き詰められています（写真１右）。これらを基礎にして、一部では土壁が残存していました。周辺から多量の瓦が出土したことから、屋根は瓦葺きであったと考えられます。構築時期は、出土した土器などから、18 世紀中頃から後半です。

石組溝２：現在も仁和寺境内の主要な排水路の一つです。中門から西へ延びる溝は、３区東側で北西方向に曲がり、敷地外の溝に続きます。溝底には一定間隔で石を置くことで、溝底が階段状になり、水がゆるやかに流れる仕組みになっています。土塀１と同様に、18 世紀中頃から後半に造られたものであることがわかりました。

土塀の役割　現在、土塀１の北側と北東側には、仁和寺の境内を区画する土塀が存在しています。図３は明治時代の絵図ですが、今回検出した土塀１と、仁和寺境内を区画する土塀が線描されています。江戸時代後半、遼廓亭北東部は二重の土塀が存在したことが明らかとなりました。土塀１の役割としては、遼廓亭から見える景色を土塀 1 までの空間に仕切るとともに、その背面での人の往来を視覚的に遮蔽するための目隠しであったと考えられます。

おわりに　遼廓亭は、天保年間末（1844）までに移築されたといわれていますが、今回の調査によってその移築年代が明らかになりませんでした。しかし、今回の調査で遼廓亭の周辺が 18 世紀中頃から後半に整備された事が判明し、この場所の、現在につながる土地利用が当該期に始まる可能性が高いことを示しています。

江戸時代の仁和寺については、寛永 17 年（1640）から正保４年（1647）にかけて復興事業が行なわれたことはよく知られていますが、それ以外の整備事業については必ずしも明らかではありません。今回の発掘調査成果は、その空白を埋めるもので、平安時代以来続く、仁和寺の歴史を考える上で重要な成果となりました。

（渡邊都季哉）

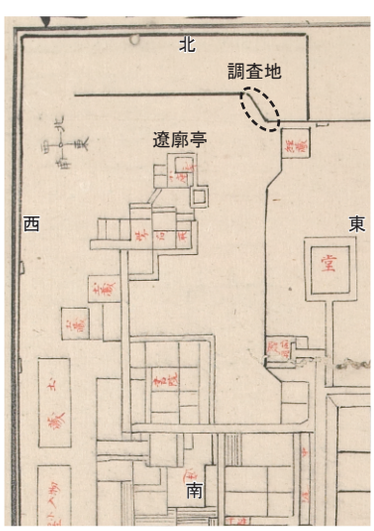

図３　絵図と調査地の関係図
『仁和寺門跡建物細圖』を一部加筆
明治４年（1871）
京都府立京都学・歴彩館蔵